

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙一 12章3～13節

³ここであなたがたに言っておきたい。神の霊によって語る人は、だれも「イエスは神から見捨てられよ」とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」とは言えないのです。⁴賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です。

⁵務めにはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ主です。⁶働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。⁷一人一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです。⁸ある人には“霊”によって知恵の言葉、ある人には同じ“霊”によって知識の言葉が与えられ、⁹ある人にはその同じ“霊”によって信仰、ある人にはこの唯一の“霊”によって病気をいやす力、¹⁰ある人には奇跡を行う力、ある人には預言する力、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言を語る力、ある人には異言を解釈する力が与えられています。¹¹これらすべてのことは、同じ唯一の“霊”の働きであって、“霊”は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです。

¹²体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。¹³つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 11章17～27節

¹⁷さて、イエスが行って御覧になると、ラザロは墓に葬られて既に四日もたった。¹⁸ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほどのところにあった。¹⁹マルタとマリアのところには、多くのユダヤ人が、兄弟ラザロのことで慰めに来ていた。²⁰マルタは、イエスが来られたと聞いて、迎へに行ったが、マリアは家の中に座っていた。²¹マルタはイエスに言った。「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。²²しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています。」²³イエスが、「あなたの兄弟は復活する」と言われると、²⁴マルタは、「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」と言った。²⁵イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。²⁶生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」²⁷マルタは言った。「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。」

一つの体となるために

先週は、連休の最中に、この礼拝堂で一組の兄弟の結婚式を執り行いました。新郎は 20 年前にここで洗礼を受けられた兄弟、そして新婦はつい二週間前にここで洗礼を受けられた姉妹でした。参列くださった教会の皆さんは、口々に「久しぶりの結婚式だ」とおっしゃっていましたが、まさに信仰の家族としての教会の交わりの中のご結婚で、教会全体にとっても喜びのときでした。今回の結婚式は、お二人のご希望もあってできるだけ簡素な形で整えて執り行いました。そうであっても、結婚式には欠かせないことがあります。結婚の宣言です。二人の誓約を受けて、二人が夫婦であることを宣言するのです。そのときに告げられる言葉は、主イエスが創世記の御言葉を引いてお語りになられた言葉です。「人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから二人はもはや別々ではなく、一体である。神が結び合わせてくださったものを、人は離してはなりません」(マルコ 10:7~9)。

使徒パウロも、結婚に関する教える中で、同じ御言葉を引いて語っていることがありました。夫と妻は、互いに仕え合うように、と勧めている箇所ですが、「人は父と母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる」(エフェソ 5:31) と創世記の御言葉を引いて教えながら、パウロは、実はこれは、教会とキリストとの関係、わたしたちとキリストとの関係を述べているのだとして、こう言うのです。「わたしたちは、キリストの体の一部なのです」(エフェソ 5:30)。

パウロは、主イエスが教えられた結婚の神秘を、ほとんどそのまま教会の神秘、キリスト者の交わりの神秘と同一視している、と言ってもよいでしょう。今日の使徒書日課で、パウロは、「わたしたちは…、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです」と言っています。洗礼を受けるということは、一つの体になること、しかも、キリストの体の一部となることなのです。それは、しかし、各自の自由な意志で加わったり離れたりしてよいようなものではない。結婚が、神によって二人が一体となるように結び合わされることで、人の意志でそれを引き離してはいけない、と教えられるように、洗礼によってキリストの体の一部に結び交わされた者は、本人だろうと他の誰であろうと、それを引き離すようなことをしてはいけない、というのです。

もちろん、わたしたち人間の営みは、御心に適うことばかりではありません。信者同士の結婚生活が破綻することもありますし、一つの教会の交わりの中に留まり続けられないこともあるでしょう。その破れを、痛みをもって受けとめ、癒しを求めて祈るしかないこともあるでしょう。

そうだとしても、わたしたちは、なお、神の御心がどこにあるのかを、繰り返し心に留めなおすように教えられているのです。結婚の営みを通して、洗礼の営み、教会の交わりの営みを通して、神は、わたしたちを一つの体に結び合わせようとなさっている。キリストの体という一つの体に結び合わせ、わたしたちが決してそこから離れてしまわないように、そこに留まり続けるようにと、願ってくださっている。これは、偉大な神秘的なものです。

主がここにいてくださるならば…

イースターから歩み始めた「復活節」も、まもなく折り返し地点を迎えます。七週間の歩みを経て、わたしたちは、ペンテコステの「聖霊降臨」の祝いへと至ります。復活を信じる弟子たちのもとに聖霊が降り、神の御業を宣教する教会が誕生したことを記念する祝いです。主イエスは、復活されて弟子たちと四十日を共に過ごされた後に天の昇られたと伝えられていますが、その十日後、イースターから五十日後に、弟子たちに聖霊が与えられた、と聖書は物語っています。その出来事を辿りながらペンテコステの祝いへと向かうわたしたちは、いわば、この期節に、聖霊をお迎えする備えをしていると言ってもよいでしょう。

けれども、そのような教会の暦に従った備えとは関係なく、わたしたちにはすでに聖霊が与えられています。少なくとも、すでに洗礼を受けられている皆さんに対して、わたしは教会の名において、宣言する役目を与えられています。皆さんには、洗礼によって聖霊が付与されているのです。パウロも、そのことをはっきりと述べていました。「わたしたちは…皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです」。

皆さんには、聖霊が与えられているという自覚があるのでしょうか。その実感をお持ちでしょうか。しばしば、「自分は聖霊を感じられない」とおっしゃられる方があります。聖霊を、何か霊的な感動とか、心理的な高まりをもたらしものとして考えると、「聖霊を感じられない」という思いを持たれる方がいるのも当然かもしれません。もちろん、聖霊がそういう感動や高まりをもたらしことがあってもよいでしょうし、それを否定する必要はありませんが、それだけが聖霊のお働きということではないのです。わたしたちが「イエスは主である」と信仰を告白する言葉を語るのは、聖霊によることです。あるいは、パウロは、他の書簡では、わたしたちが神に向かって「アッバ、父よ」と祈ることができるのも、聖霊によることだと言っています（ロマ 8:15）。

今日の福音書では、マルタという女性が、信仰を告白する言葉を口にしています。「主よ、あなたがた世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております」。ここには、聖霊の働きが描かれているわけではありませんが、このマルタが聖霊によってこの言葉を口にしたと言っても構わないでしょう。ただ、マルタがこの信仰の告白を口にするまでには、主イエスの導きが必要だったのです。

マルタは、兄弟ラザロ、姉妹マリアと共に、主イエスと親しくしてきた者でした。ところが、兄弟ラザロが重篤な病気となってしまった。主イエスには、すぐに知らせたのです。ところが、主イエスは、どういうわけか、すぐに駆けつけて来てはくださらなかった。それどころか、わざと到着を遅らせるようなことをなさった。主イエスが彼らの家に着いたときには、ラザロは死んで墓に葬られた後だったのです。マルタは嘆き悲しみました。「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」。主の不在を嘆き、主の不在のゆえに迎えた死を、マルタは悲しまないではいられなかったのです。

あなたが生きるために！

わたしたちは、日曜日ごとの教会に集ってきて、礼拝にあずかります。何よりも、キリストにお会いするために、ここで礼拝に加えられているのです。御言葉によって、また主の食卓である聖餐の礼典によって、わたしたちは、ここを、主イエスのおいでくださる礼拝として整えているのです。ここに主イエスがおいでくださっている。おいでくださっている主イエスとわたしたちは、お会いすることができる。それは、「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」(マタイ 18:20) と、主ご自身が約束してくださったことによるのです。教会の交わりの中で、主がおいでくださってお会いできると、わたしたちは信じて、確かめ合っているのです。わたしたちだけでなく、どなたに対しても、この主がおいでくださる教会の交わりの中でこそ、主イエスとお会いいただけると信じて、ここにお招きをしているのです。

もちろん、そのように信じて、事実、ここで主イエスとお会いする経験をしていると証ししていても、わたしたちは、二千年前に一人のユダヤ人として生きられたイエスという男が、まるでタイムマシンに乗って来て登場するようなことを考えているわけではありません。そういう姿で主イエスがここにいてくださる、というのではないのです。

ラザロが死を迎えたマルタとマリアのもとに、主イエスがすぐに駆けつけることをせず、遅れておいでになられたとき、マルタは、主イエスがいてくださらなかったからラザロが死んでしまった、と言いました。けれども、マルタは、復活を信じていました。「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」。わたしたちも、そのような復活の教えを知っております。信じてもいる。「死後の後の復活の命」とでも言うべきものです。それもまた、わたしたちに約束されている復活の命です。

主イエスは、しかし、それ以上のことをマルタにお告げになられたのです。「わたしは復活であり、命である」。主イエスは言われたのです、「今、ここにいるわたしが、復活なのだ、命なのだ」と。

主イエスは、どのようにして、そこにいらっしゃるのでしょうか。主イエスは、復活の御体として、そこにいらっしゃるのです。それは、わたしたちが、洗礼によって結びつけられたキリストの御体です。キリストは、復活の体を、わたしたちと結びついた姿で、ここに現してくださっている。ここにいらっしゃっている。聖霊の御導きによって洗礼にあずかるものとされたわたしたち。洗礼によってキリストと結びつけられたわたしたち。そのわたしたちが、一つの体とされている。キリストの体、キリストのご復活の体、一つの命にあずかる体とされている。

皆さんは、キリストの復活の体に加えられて、ここにいらっしゃるのです。死んでも生きる、決して死ぬことのない一つの命に結ばれるために、ここにいらっしゃるのです。「このことを信じるか」と、主はわたしたちにお呼びかけになります。マルタと共に「はい、主よ、信じます」と答えて、わたしたちは主の御体の聖餐にあずかるうではありませんか。